

報告

重度頸髄損傷者の一人暮らしに学ぶ ～島本卓さんの講演を聞いて～

横山 和也

大阪頸髄損傷者連絡会

インテックス大阪で開催されたバリアフリー 2025 のセミナーで、日本リハビリテーション工学協会関西支部 幹事 島本卓さんによる「重度身体障害者の一人暮らし」についての講演を拝聴しました。

島本さんは、重度の頸髄損傷により首から上しか動かせない状態にありますが、訪問介護や福祉機器などを駆使し、自立した生活を送っておられます。その姿は、重度障害があっても自分らしく暮らすことは可能であるという強いメッセージを私たちに届けてくれました。

私は島本さんと個人的にも親しくさせていただいており、これまでに彼の生活の様子を何度も聞いてきました。たとえば、チンコントロール（あごで操作する方式）で電動車椅子を自在に操る姿、ベッド上でも快適に使えるように工夫されたパソコン操作環境など、どれも生活をより自由に、そして快適にするための工夫が随所に見られました。

講演では、福祉機器や支援制度を単に「利用する」だけではなく、それらを「どう使いこなすか」「自分の生活スタイルにどう合わせるか」といった視点の重要性が強調されていました。

私自身も、26歳のときに旅行中の事故でC5完全麻痺となり、腕は少し動かせますが握力はなく、日常生活の多くの場面で人や道具の支援が必要です。そのような中で、島本さんのようにさらに重度の障害を持ちながらも、自分らしい生活を追求している姿を見ることで、「自分にもできることがまだある」「もっと工夫できる余地がある」と前向きな気持ちを

もらいました。

私は現在、重度障害者が安心して暮らせる住環境を届けることを目的とした「Wheelife（ウィーライフ）」という事業を立ち上げ、活動を行っています。これは、頸髄損傷者としての自身の経験をもとに、車椅子ユーザーが快適に過ごせる住宅の普及を目指すもので、実際に泊まって体験できるモデルルーム「WADACHI（わだち）」を大阪市港区にオープンさせました。住まいの課題は、重度障害者にとって生活の基盤であり、その質が生活の自由度を大きく左右します。そうした課題に対して、福祉・建築・不動産の専門家と連携しながら、実際の住空間づくりを進めています。

島本さんのような実践者の存在は、私たちの活動の原点を改めて見つめ直す機会を与えてくれます。福祉機器や支援制度があっても、それをどう使い、自分の生活にどう活かしていくかは本人の意思と工夫にかかっています。そして、当事者の声を社会に届け、必要な仕組みや環境を整えることは、私たち自身の役割もあります。

今回の講演は、重度障害者が「受け身の支援を受ける存在」ではなく、「主体的に生活を選びとる存在」であることを示してくれました。リハビリテーション工学はこうした生活を技術面から支える大きな力であり、今後もその価値はさらに高まっていく感じています。

私自身も、今後さらに多くの当事者や専門職と連携しながら、希望ある未来を描ける社会づくりに貢献していきたいと思っています。